

經濟論叢

第130卷 第5・6号

病院組織と医療費……………	西村 周三	1
設備投資決定のプロセスと基準 (2)……………	浅沼 万里	23
ナチ・レジーム初期の雇用創出政策(上)……………	後藤 俊明	52
カナダにおける小麦生産調整と 農業構造の変化……………	松原 豊彦	70
西ドイツ労働組合運動の復活……………	久本 憲夫	95
日本経済の社会階層別計量モデルの作成……………	小川 雅弘	114

経済学会記事

經濟論叢 第129卷・第130卷 総目録

昭和57年11・12月

京都大學經濟學會

記 事

経済学会大会

昭和57年度経済学会大会は、11月20日（土）の午後、名誉教授を含む51名の会員の出席をえて、経済学部特別講義室で開催された。報告者とテーマは下記のとおりである（敬称略）。

- 1 高 増 明（京都大学大学院生）
「ネオ・リカード派の貿易理論」
- 2 保 住 敏 彦（愛知大学法経学部助教授）
『金融資本論』執筆時のヒルファディング」
- 3 浅 沼 萬 里（京都大学経済学部助教授）
「取引様式の経済分析——内部資本市場を中心に——」

高増氏の報告は、資本を本源的財ではなく、商品として把握したネオ・リカード派の価格・数量モデルの視点に立って、リカードの比較生産費説、それを精緻化したヘクシャー＝オーリン＝サムエルソン理論（HOS理論）および先進国と途上国のあいだに「不等価交換」が存在すると主張するエマヌエル等の理論を批判的に検討したものである。ネオ・リカード派の体系を適用すれば、貿易はつねに両国の利益になるとはかぎらず、また資本の豊かな国が貧しい国を搾取する可能性があるという数量的に明確な指摘には興味深いものがあった。

ヒルファディングの『金融資本論』が、当時の社会運動、先行者の思想、経済状況を背景に、形成される過程を豊富な資料を駆使して追跡しようとしたのが、保住氏による報告である。とりわけ「金融資本範疇」の問題点とその原因を執筆時の時代背景にもとめ、また『金融資本論』に組織資本主義論の萌芽があるという主張は注目をひいた。詳しくは氏の「『金融資本論』執筆時のヒルファディング(1)、(2)」(愛知大学法経学会『法経論集』経済・経営篇Ⅰ、第97、98号)を参照されたい。

浅沼氏の報告は、企業を質点としてではなく組織としてとらえるという近年の研究を基本的文脈におき、複数のユニット（または主体）が物的活動、制御活動において展開する関係を取引として概念化するという方法にたつて、資本の取引が企業組織の中に内部化される根拠を理論的に説明すると同時に、設備投資決定プロセスにかんする氏の調

査結果をもとにそれを経験的にうらづけようとする意欲的なものであった。

それぞれの報告について会員間の討論が行なわれ、活潑な研究集会になった。運営に尽力いただいた関係者に謝意を表したい。

(研究集会委員 高寺・瀬地山)